

花衣俳人 杉田久女

館長 佐木 隆三

2008（平成20）年1月、北九州市立文学館文庫③『杉田久女句集』を刊行したとき、わたしが解説を引き受けて、「奇異の念をいだかれるかもしれないから、初めに経緯を説明しておきたい」と弁明しています。それはNHK福岡放送局が、ラジオドラマ「松本清張短編シリーズ」を制作するにあたり、わたしが「菊枕」の脚色をしたからで、1964（昭和39）年12月24日午後10時15分から、25分番組として放送されました。

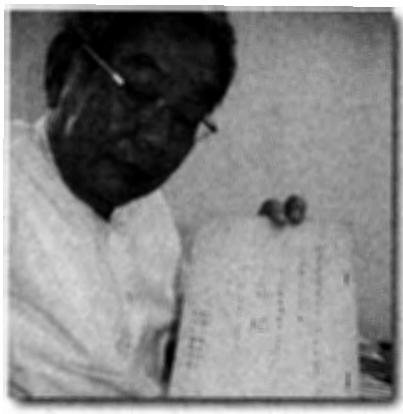
脚色した者として責任を感じたからにほかなりません。

近年になって、田辺聖子著「花衣ぬぐやまつわる……わが愛の杉田久女」に代表されるように、女性の表現者がかかえた苦悩や、優れた作品そのものに再評価がなされています。高濱虚子による「国子の手紙」が、発狂説を流布させたことは明白で、永年の胸のつかえが解消しました。

今秋の第10回特別企画展「花衣 俳人杉田久女」は、小倉の地からデビューし、近代女性俳句の草分けとして活躍した久女像を正しく伝え、「文化のまち北九州」のイメージアップを図り、地域の文芸振興を願うことです。

松本清張が「或る『小倉日記』伝」で第28回芥川賞を受け、「菊枕―ぬい女略歴」を発表して話題になったのは、主人公の「三岡ぬい女」は杉田久女、俳誌「コスモス」はホトトギス、主宰者の「宮萩梅堂」は高濱虚子だと、さほど俳句に縁のない人たちにもわかったからです。

その44年前の放送台本を、わたしが手元に保存していました。NHKのプロデューサーから、「清張先生は原作に忠実なドラマだと満足しておられました」と告げられたけれども、折りにふれて「三岡ぬい女」が久女の実像と異なることに気づき、遺族が「菊枕」の作家に抗議したことを知り、



佐木館長脚色「菊枕」放送台本

目次

- 花衣 俳人 杉田久女 1
- 第9回特別企画展
「映画の中の日本文学-昭和編-
いつもそばには本と映画があった」 2
- 映画「二十四の瞳」上映会&対談 3
- 開会記念講演会「映画の中の日本文学」
- 映画あれこれ-北九州映画塾 4

- 第17回与謝野晶子短歌文学賞
表彰式・選評会・特別鼎談・歌会 5
- 佐木隆三館長と学ぼう！こどもペンクラブ
- 火野葦平資料目録完成
- 義捐金ご協力について
- 文学館ホームページリニューアルのおしらせ
- 平成23年夏の企画展
「昭和20年8月9日は〈小倉原爆〉だった」 6
- 夏の企画展関連イベント 佐木隆三館長のゲスト対談 6.7
- 第10回特別企画展ごあんない 8
- 資料寄贈者・提供者・受贈雑誌一覧

◆ 第9回特別企画展

「映画の中の日本文学 ―昭和編― いつもそばには本と映画があった」

平成23年4月23日(土)～6月19日(日)



会場の様子

昭和の幕開けから“日本映画黄金時代”と称された昭和30年代までの文芸映画を中心に、文学との関わりを紹介する展覧会を開催しました。



開会式

右より松永武さん、中田勝康さん、田中眞澄さん、佐木館長

本展の第一部「昭和の幕開け」では、無声映画が観客に伝えることの出来なかつた繊細な表現を、有声映画（トーキー）が可能にしたことを紹介。これにより、谷崎潤一郎「春琴抄」や長塚節「土」などの文学作品の映画が誕生しました。

しかし、次第に戦争の影響を受け、ニュース映画や国策映画が銀幕の主流となつていきました。

第二部「戦争は終わった」では、戦後の新たな時代の訪れを実感する映画が作られたことを紹介。若者たちの青春時代を爽やかに描いた石坂洋次郎「青い山脈」の映画化や、1950年代の文学全集の刊行や文庫本ブームを背景に、純文学作品の映画化がみられました。また、野間宏「真空地帯」や梅崎春生「日の果て」、壺井栄「二十四の瞳」などの戦争体験を基にした映画も作られています。

第三部「もはや戦後ではない」では、石原慎太郎「太陽の季節」が映画になり、若者の風俗や思想に影響を与えたことを紹介。一方、戦争を題材とした大長編作、五味川純平「人間の條件」が映画化され、興行的に成功し

ました。

この時期から、週刊誌の創刊が相次ぎ、文学と読者、文学と映画の関係はより身近なものになります。剣豪小説、サラリーマン小説、推理小説など、連載小説のベストセラーが映画となり、さらに人気を博しました。

第四部「北九州の文学と映画」では、森鷗外「阿部一族」、林芙美子「放浪記」、火野葦平「花と龍」、岩下俊作「無法松の一生」といった、北九州ゆかりの作家の文学作品で映画化されたものを紹介。

その他にも「だから時代劇はやめられない」と題して、「鞍馬天狗」や「丹下左膳」「梟の城」などの時代劇、チャンバラ映画について取り上げたコーナーを設け、「銭形平次捕物控」で知られる野村胡堂の自筆原稿などを展示。

川端康成「伊豆の踊子」、夏目漱石「坊ちゃん」、谷崎潤一郎「春琴抄」など、何度も映画化されている文学作品については、映画監督やその時代の特徴を対比できるように資料をまとめて展示しました。

映画ポスターやスチル写真、原稿本や自筆原稿など、200

作品以上、400点を超える貴重な映画や文学資料を通して、文学と映画との関わりを改めて見直し、日本文学の魅力を再認識する展覧会となりました。

展示資料約400点

入場者1697人

(館外イベント含む)

来館者の声

◆再び読んでみようと思ひ直した文学作品や新たに読みたいと思う作品があり、よかったです。(10代・女性)

◆戦前、戦中、戦後にかけての映画の変遷が大変興味深かったです。(20代・男性)

◆時代の背景を探り、紹介していたのが印象的でした。(40代・男性)

◆多くの貴重な資料を間近に見て、面白かったです。(40代・男性)

◆昔の日本映画の興味はありましたが、資料なども含めて目に触れる機会がなかったので、勉強になりました。(50代・女性)

◆作家の原稿、脚本、ポスターなど、たくさん資料で、文学作品が身近に感じられました。(60代・女性)

◆こんなに多くの文学作品が映画化されているのに驚きました。(70代・男性)

映画「二十四の瞳」

上映会&対談

平成23年6月18日(土)

関連イベントとして、映画「二十四の瞳」(松竹配給 昭和29年公開 木下恵介監督/高峰秀子主演)の上映会と対談を行いました。

ゲストは松永文庫室長の松永武さん、聞き手は文学館副館長の今川英子でした。

松永さんは、映画「二十四の瞳」について、直接戦争をイメージできるシーンはないのに、反



対談 右より松永武さん、今川副館長

戦映画の名作として評価されていることが魅力であり、そこが木下恵介監督の腕のよさであるとお話されました。

そして、「村の鍛冶屋」「七つの子」「ふるさと」「仰げば尊し」など、バックに流れる童謡とオルガン演奏が効果的に使われ、準主役といえる存在であることが挙げました。

今川副館長は原作について触れ、壺井栄の作品には、母性の強い、包容力やぬくもりを持つ人柄が表れており、「二十四の瞳」においても、子ども達が現実をひたむきに生きていく様子を描いていることが、多くの人々の心を打つのだと述べました。

この他にも、大石先生役の高峰秀子が歌手・笠置シズ子のファンだったこと、高峰秀子主演の映画

「浮雲」では、原作者の林芙美子と笠置シズ子が、成瀬巳喜男監督に頼んで「東京ブギウギ」を映画のワンシーンに流したところなど、映画にまつわる数々のエピソードを松永さんにご披露いただきました。

対談の後、最新技術を駆使したデジタルリマスター版「二十四の瞳」の上映を行いました。50年以上経った今でも色あせることのない名作を鑑賞し、会場は大きな感動に包まれました。

小倉井筒屋新館パステルホール
入場者 273人

来館者の声

◇普段聞くことのできないお話を聞き、良かったです。「二十四の瞳」も初めて見ましたがとても感動しました。(20代・女性)

◇小説で読んだ時と、本日映画で観たのでは、随分印象が変わりました。(30代・女性)

◇貴重な講演内容と映画の上映で、魅力あるイベントでした。(50代・女性)

◇名作映画に接し心が洗われ、久振りに涙し泣きました。教師と生徒の純粋さに心うたれました。(70代・男性)

開会記念講演会 田中眞澄さん

「映画の中の日本文学」

平成23年4月23日(土)

本展の開催を記念して、映画・文化史家の田中眞澄さんにご講演いただきました。

20世紀の文学は、大衆的な小説が大きな要素を占め、それが映画と結びついていきます。大正時代には「金色夜叉」「不如帰」のように小説が芝居となり、それを映画化する形で親しまれました。

全国の芝居小屋は次第に映画館へと姿を変え、1920年代にはその数が逆転していきます。同じ時期に、映画会社では俳優養成所や研究所を作るなど、映画を近代化する動きがみられます。もう一つ重要な点として、菊池寛の新聞連載小説「真珠夫人」の映画化が挙げられます。これを皮切りに、新聞小説が映画化される流れができました。このように、1920年代は映画にとつて大きな転換期となりました。

1930年代にトーキーが登場したことで、文芸映画のブームが起きます。豊田四郎監督

の「若い人」のヒットが一つの大きな推進力になり、意欲的な若手監督達が純文学作品を映画化していきます。しかし、その後戦時体制に入り、文学作品の映画化はほぼ途絶えました。

戦後、自由な映画制作が可能になると、新聞連載小説を原作とする「青い山脈」や、ラジオドラマを映画化した「君の名は」などが作られました。

1950年代は、石原慎太郎の「太陽の季節」や原田康子の「挽歌」が映画化され、新しい世代の登場がみられる一方、五味川純平の「人間の條件」を小林正樹監督が何年にもかけて映画化するなど、戦後の複雑な思いが重なり合った時期でした。

参加者 43人



田中眞澄さん

映画あれこれー北九州映画塾

特別企画展の開催に合わせて、北九州でさまざまな立場から映画に関わっていらつしやる方々を講師としてお迎えし、講座「映画あれこれー北九州映画塾」を行いました（北九州市立生涯学習総合センター「北九州市民カレッジ」との共催事業）。

矢野 寛治さん

〈映画と文学 5月21日〉

矢野さん

は、コピーラ
イター・映画
評論家として
活躍されてい
ます。



映画は、川端康成原作、豊田四郎監督「雪国」のように、原作に忠実に撮られたもの、また、三島由紀夫原作、市川崑監督「炎上」（原作名「金閣寺」）のように原作を改変したもの、そして、深沢七郎原作、今村昌平監督「楳山節考」のように複数の作品の内容を合わせて一つの映画作品としたもの、この三つに大別されるとして、原作との内容の比較を解説されました。

その他、小津安二郎監督「東京物語」や成瀬巳喜男監督「浮雲」など、各監督の代表作の特徴をお話しくださいました。

田中 寿一さん

〈東宝時代 5月28日〉

元東宝プロ

デューサーの
田中寿一さん
に、映画製作
の現場体験を
語っていただ
きました。



助監督の頃に先輩から「撮影所内は歩くな、座るな、走れ」必ず撮影の1時間前に入れ」と言われ、食事以外の時間は座れなかったこと、早い時間から現場に入って俳優の体調を把握したことなど、多くのエピソードをお話されました。

また、独自の撮影方針を貫いた黒澤明監督、俳優出身で脚本家を大切にされた稲垣浩監督、映画のカットにこだわった岡本喜八監督など、著名な監督の製作スタイルについても述べられました。

松永 武さん

〈本から映画へ 6月4日〉

映画資料の

収集、公開を
行う松永文庫
室長の松永武
さんに、文学
と映画の関係
をお話しいた
きました。



トーキーの登場により、「土

」残菊物語など多くの文芸映画

が作られ、また菊池寛や大佛次郎、吉川英治などの大衆文学が盛んに映画化されていく様子などを、日本の映画史と共に語っていただきました。

また、綿密に描かれた新聞連載の挿絵が当時の俳優の衣装や演技の手本となったことや、ポスターに書かれた惹句（キャッチコピー）の面白さなどは、映画資料を知る松永さんならではの視点からのお話でした。

前原 美織さん

〈小倉昭和館今昔 6月11日〉

小倉昭和館

支配人の前原
美織さんに、
創業72年を迎
えた昭和館の
変遷を、映画



興行の歴史とともにお話していただきました。

昭和館で行っている2本立ての上映は、現在九州で実施しているところは他になく、根付かせるのは大変だったそうです。

また、ドキュメンタリー映画特集や高倉健主演の映画特集などミニシアターならではの独自性を生かした企画をされたとのことでした。

今後も新しい切り口で、来館者の要望を取り入れながら、地域密着型の姿勢を大切に運営していきたいと語られました。

日々谷 健司さん

〈北九州フィルム・コミッションの活動 6月25日〉

北九州市報

道課 フィルムコミッション
担当係長の
日々谷健司さ
んに、活動に
ついて語って
いただきました。



映画やテレビドラマ、CMなどの撮影を数多く誘致し、その支援活動に奮闘している日々谷さん。北九州市は、都会でありながら古い街並や建築物が残り、また自然にも恵まれた魅力ある

都市だと述べられました。

映画の誘致を、北九州市の知名度やイメージアップにつなげ、これからのまちづくりを活用していきたいそうです。「映画の町北九州」を皆で作りに上げて生きたいと熱くお話しいただきました。

受講者II延べ244人

来館者の声

講師の方々は、どなたも映画に対する情熱をもってお話しを聞かせて下さいました。

（50代・女性）

映画をみて、元気をもらうことが多いので、その映画のあれこれ話が、とても楽しい時間になりました。

（50代・女性）

まさに、映画あれこれ、映画を多角的にとらえ、バラエティに富んだ講師の言葉を聴き、面白かったです。

（60代・男性）

私の若かりし頃（約50年前）の娯楽と言えば映画しかなく、今回その当時を解説してもらい、振り返ってみて良かった、話等も聞けて楽しく受講できました。

（70代・男性）

◆ 第17回与謝野晶子短歌文学賞

表彰式・選評会・特別鼎談・歌会

今春、産経新聞社主催、北九州市立文学館共催により、第17回与謝野晶子短歌文学賞を実施。その表彰式と特別鼎談が、7月16日北九州国際会議場にて行なわれました。

今回も各地から、世代を超えて20,897首の応募があり、表彰式には県外からも数多くの参加者がありました。

一般部門では、岡山市の岡部かずみさんの、

ゆふぐれが連絡船を待つてゐる
「門司港行き」の矢印のまへ

が、青春の短歌部門では、東京都の酒井志寿花さんの、

微笑んだ写真の中あの人は
ずれた編み目のマフラー巻いて

が、それぞれ、文部科学大臣賞に選ばれました。

選者である篠弘、伊藤一彦、今野寿美、永田紅各先生をはじめ、馬場あき子、永田和宏先生といった日本の歌壇界を代表す

る先生方が参加されました。

引き続き行なわれた鼎談では、「近代・現代の恋の歌」をテーマに、伊藤、永田和、馬場先生が、分かりやすく、時には軽妙に、そして深く、恋を詠んだ短歌について、それぞれの論を展開されました。

翌17日は、先生方を中心に歌会を開催。午後は、門司港や飯塚の伊藤伝右衛門邸など、短歌ゆかりの地を訪ねました。

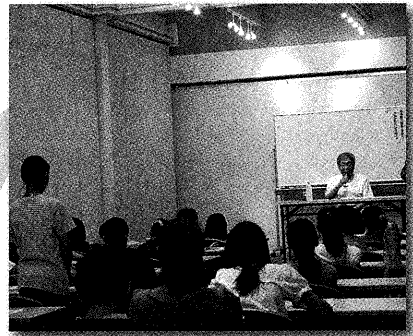
小倉祇園祭が開催中で、街全体がお祭りムードだったこともあり、盛会の2日間になりました。入場者1365人



鼎談の風景

◆ 佐木隆三館長と学ぼう！「こどもペンクラブ」

平成23年7月30日(土)・8月6日(土)・8月20日(土)



佐木館長にインタビュー

佐木館長が講師を務める小学生対象の文章教室「こどもペンクラブ」を今年も開催し、23人が参加しました。

今年の取材テーマは「戦争中の北九州市と長崎原爆について」です。

1日目は、取材の方法や文章を書く時のポイントなどを学んだ後、企画展「昭和20年8月9日は〈小倉原爆〉だった」を見学しました。当時の北九州市の様子やヒロシマ・ナガサキの原爆の被害など、写真や戦時資料を見て、取材メモをとりました。

2日目は佐木館長へのインタビューに挑戦。当時8歳だった佐木館長が広島でのご雲を見

たことを聞き、「ぎのご雲を見た時に、何が起ったのだと思いましたが」など次々に質問をしました。その後、取材を通し てわかったことをルポにまとめました。

3日目は、書き上げたルポを発表し、館長が講評しました。

参加者からは、「知らないことを学べて良かった」「学んだことをしっかりと心にとめておこうと思う」などの声が寄せられました。また、保護者からは「日頃体験できないことに触れ、考えることができたようだ」と感想をいただきました。

館長自筆の講評が入った作文は、9月30日まで文学館で展示しました。参加者123人



企画展を取材する様子

◆ 火野葦平資料目録完成しました！

文学館では、火野葦平のご遺族より寄託を受けた貴重な資料の内容把握と整理を進めています。このたび、第一段階の内容をまとめた目録が完成しました。

既に全国の国公立図書館等に配布し、文学館でもご覧いただけます。

今後、火野葦平研究が進んでいくことが期待されます。

◆ 義捐金のご協力

ありがとうございました

3月11日に発生した東日本大震災について、来館者の皆様にご協力をお願いしております。義捐金が、6,036円(9月1日現在)になりました。全額福岡県共同募金会を通じて寄付しています。ご協力ありがとうございました。

文学館ホームページ

リニューアル!!

是非アクセスを!!

<http://www.kiakyushuacity-bungakukan.jp/>

平成23年度夏の企画展

「昭和20年8月9日は

〈小倉原爆〉だった」

平成23年7月20日(水)〜8月31日(水)

昭和20年8月9日、長崎に投下された2発目の原子爆弾は、小倉に投下される計画でした。

戦時中の小倉には、「小倉陸軍造兵廠」という兵器工場がありました。ここで、戦車や機関銃、小銃などの兵器を製造、修理したため、原子爆弾投下目標地になったのです。しかし投下直前の小倉上空は、視界不良のため急遽目標が長崎に変更となりました。

今回の企画展は、「この事実を広くみなさんに伝えたい」という佐木館長の強い思いから開催。

会場には、ヒロシマ・ナガサキの被爆資料や写真のほか、小倉陸軍造兵廠、八幡大空襲の戦時資料を展示。また佐木館長が8歳のときに、原爆のきのこ雲を見たときのことを日記のように綴った絵本『昭和二十年八さいの日記』も紹介。イラストレーター黒田征太郎さんが絵を担

当しました。

夏休み期間でもあり、多くの子どもたちが来館。原爆の恐ろしさや小倉に原爆が投下される予定だったことを知り、驚いている様子でした。

また、13日から18日までは、福岡県の戦時資料展も同時開催され、こちらも多くの方に見ていただくことができました。

展示資料約1000点
入場者数3760人

来館者の声

◇原子爆弾と戦争はこわいなと思いました。

(小学生・男性)

◇小倉に投下されるはずの爆弾が長崎に投下されたため、小倉の人が長崎の人に、申し訳ないという気持ちを持っているということに悲しさを感じます。

(30代・女性)

◇あらためて小倉と長崎(広島もですが)の運命の不思議さ、むごさを考えさせられた。

(40代・男性)

夏の企画展 関連イベント

佐木隆三館長のゲスト対談

ゲストと館長に戦争や原爆について語っていただきました。

工藤洋三さん

(徳山工業高等専門学校教授 7月20日(水))

工藤さんは日米対戦でのアメリカ軍側の戦時資料を研究されています。

工藤さんは戦争の「記録」が重要であると考え、通信記録(電文)の研究・翻訳を始められたとのこと。アメリカの国立公文書館まで何度も出向いて調査した結果、小倉に原爆が投下されなかつた理由を公文書上で確認したそうです。(次ページ写真参照)

それ以外に

も原爆投下までの作戦や動向、原爆投下当日の作戦本部と原子爆弾を運んだB29のやりとりなどを解説していただきました。

会場からは、多くの質問があり、関心の高さが伺えました。

参加者40人



たこのことです。

現在は、トランペット奏者の近藤等則さん他、各界を代表する多くの方が、趣旨に賛同され、音楽ライブやトークショーなどのイベントを行っています。黒田さんは、「この活動を決して止めない」と力強く語っていました。

参加者51人

山本ナミ子さん(八幡大空襲体験者)

7月30日(土)



八幡大空襲体験者の山本さんには、約300人の方が窒息死した小伊藤山防空壕内での体験を語っていただきました。

山本さんによると、当時小伊藤山防空壕には、たくさんの方が逃げ込んでいたそうです。しかし出入り口付近にあった印刷工場が燃え出し、壕内に煙が充満したそうです。人々は煙と熱さで外へ逃げようとしていましたが、多くの人が窒息して亡くなりました。助かったのは山本さんも含め数名とのこと。山本さんは、当時の様子を思い出され、目に涙を浮かべなが



対談の様子
黒田征太郎さん(右) 佐木館長(左)

黒田さんはニューヨークに住していたころ、9・11テロを体験したとのこと。アメリカのみが無差別大量殺戮に見舞われたかのように世界貿易センター跡地を「グラウンド・ゼロ(爆心地)」と称す様子を見て、憤りを覚えたそうです。「グラウンド・ゼロ」は、世界各地にあり、日本には広島・長崎がある。世界中の「グラウンド・ゼロ」や命について考えようとして、ピカドンププロジェクトを誕生させ

ワシントン D. C. 25 (旧用紙使用)

受信通報
TOP SECRET

テレコン通報番号 CMDW576
主題 センターボード作戦に関する帰還報告
日付 1945年8月9日

宛先 合衆国陸軍戦略航空軍司令官、カーク・ボトリック宛
発信 第8陸軍航空軍司令官の許可により、アシワース中佐
090600Z[091500J]

この通報は、090345Z[091245J]に沖縄に着陸したス
ウィーニー(Sweeney)、ホプキンス(Hopkins)、ボック(Boc
k)から、ファレル宛の(TOP SECRET)である。予定時刻に
会合点に到着したが、約40分待ってボックの操縦する機と
合流できただけであった。天候の報告を受けて第1目標の
攻撃を決定した。090555Z[090955J]に目標地域に到着し
た。目標は雲量およそ3/10、若干の「もや」と濃い煙(some
haze and heavy smoke)がかかっていた。第1目標に3回
の爆撃航程をとったが、目標は毎回「もや」と煙(haze and s
moke)で見えなかった。50分後に第2目標を攻撃することに
決めた。攻撃は先に発した投弾完了報告の通りに行われ
た。レーダーで接近して、最後のおおよそ30秒間だけ目視に
よった。ホプキンスとボックを含めた観測者と暫定的に協議
した結果、爆撃箇所はおおよそ三菱製鋼および兵器工場、目
標番号546である。目撃した効果は、広島と同等か、ことよ
るとそれより大きいというのが一致した意見である。煙の柱
とキノコ雲は、3分間でおおよそ30,000フィート[9,000m]に達
し、まもなく少くとも40,000フィート[12,000m]に達した。埃は
少くとも直径2[3.2km]の地域を覆った。おそらく爆風の火
部分は無駄な地域を襲ったものと思われる。高空における
ガソリンの消費、余計な巡航、会合の失敗、第1目標での時
間超過が、攻撃部隊として沖縄に到達する機会を失う危
険を冒しても、投下を決定させた。 終
TOD 0800Z[1700J]



会場の様子



対談の様子(右から森啓太郎さん、佐木館長)

THE MAKING OF AN EXACT COPY OF THIS MESSAGE, AND ITS TRANSMISSION TO OTHER PLACES MUST BE AUTHORIZED SUBJECT TO NORMAL PROCEDURES FOR THE SAFEGUARDING OF MILITARY INFORMATION.

TOP SECRET
INCOMING MESSAGE

SECTION	INITIALS	COPY NO.
REPLY BY		3
REPLY DATE		
REPLY TIME		
REPLY BY		

CLASSIFICATION TOP SECRET

CHRY 576 8 August 1945

EXHIBIT REPORT FOR CHIEFSBOARD OPERATION

OPERATOR: COMCHINAAP 8
For Kilpatrick

OPERATOR: COMCHINAAP 8
Who passes for Commander

OP0600Z

This message for Farrell (Top Secret), Sweeney, Hopkins and Bock landing Okinawa.

090345Z. Arrived rendezvous point at scheduled time, waiting about forty minutes being joined by aircraft piloted by Bock only. Received weather reports and made decision to attack primary target. Arrived in target area 090555Z. Target about 3/10 cloud with some haze and heavy smoke. Made 3 runs on primary but each time target was obscured by haze and smoke. After fifty minutes decided to attack secondary. Attached in accordance with report already submitted. Approach made by radar with about last thirty seconds visual. Preliminary conference with observers with Hopkins and Bock places impact approximately on Mitsubishi Steel and Arms Works, target number 546. Consensus of opinion visual effect equal to or probably greater than at Hiroshima. Column of smoke and mushroom reached about 30,000 feet in 3 minutes and soon reached at least 40,000. Dust covered area at least two miles in diameter. Probably fair amount of blast on unprofitable areas. Gasoline consumption at high altitude, circling, failure to rendezvous, and time over primary target forced decision to drop rather than attempt questionable chance of reaching Okinawa with unit.

END
TOD 0800Z

CLASSIFICATION TOP SECRET

アメリカ軍の原爆投下に係る電文(左)と日本語訳(右)
(米国立公文書館蔵 工藤洋三氏提供)

出典「ティンアン・ファイル」は語る 原爆投下暗号電文集
2002年7月24日 奥住喜重・工藤洋三 著・発行

ら、「戦争は嫌ですね。」としみ
じみ語られました。
参加者40人
8月9日(火)

宮崎勝弘さん(梅光学院大学教授)

元朝日新聞
記者の宮崎さ
んは、記者時
代、原爆を自
分の身近なこ
ととして広く
知ってもらうにはどうしたらよ
いかと考えていたとのこと。そ
こで自分たちの住む小倉に原爆
が落ちていたら、果たしてどれ
くらい人が亡くなり、建物がど
うなったのか被害を想定した記
事を書くことにしたそうです。

九州大学の森教授(当時)と
の共同作業で、当時の人口分布
や建物の立地、8月9日の天候
や風向きなど調査・再現し、そ
こに長崎型の原子爆弾が投下さ
れたと想定して、被害をシミュ
レーションしました。

その結果は、死者5万7千人、
爆心地より半径4kmは、壊滅と
いう恐ろしい内容でした。

会場にも記事を表示してお
り、「小倉に原爆が落ちていた
ら自分は死んでいた」「父が小



倉造兵廠に勤めていた。自分が
生きているありがたさを感じ
る」など多くの感想が寄せられ
ました。
参加者60人
8月21日(日)

岳藤悟さん(八幡大空襲体験者)

岳藤悟さんには、ご自身が制
作される折鶴画についてお話し
ていただきました。

折鶴を折り
はじめたきつ
かけは、広島
の原爆病院に
被爆した知人
をお見舞いに
行ったことがきっかけでした。
それから被爆者を励ますた
め、平和への折りを込めて折鶴
を折り始めたそうです。さらに、
その小さな折鶴を貼って絵を描
くこともはじめました。それが
折鶴画とのことでした。

岳藤さんは、中学生のときに
八幡大空襲を体験されました。
そのときの様子が、折鶴画のモ
チーフになっていくとのこと。

作品は、今回の企画展でも展
示され、多くの方が立ち止まり
感慨深く見入っていました。

参加者42人



森啓太郎さん(八幡大空襲体験者)
8月27日(土)
森さんは、
国民学校3年
生のときに八
幡大空襲を経
験しました。
当時、2人
の弟と祖父母とで暮らしていま
したが、空襲の際は別々に避難、
自分は助かったけれど、小伊藤
山防空壕に逃げた祖母と弟2人
は亡くなりました。
壕の入り口付近で起こった火
災により、ほとんどのの方が窒息
で亡くなった小伊藤山防空壕で
すが、その遺体はまるで眠って
いるかのようにだったと森さんは
証言されました。
3人のきれいな死に顔だけは
今でも忘れられないそうです。
森さんにとって小伊藤山防空
壕は、1年生に上がったばかり
だった弟と一緒に遊んだ楽しい
思い出の場所でした。思い出の
場所で大切な人を亡くした森さ
んは、何度も何度も「こんな戦
争は二度としてはいけない」と
繰り返しおられました。
参加者38人



◆ 第10回特別企画展
花衣 俳人 杉田久女

花衣ぬぐやまつはる紐いろく

大正時代から昭和初期にかけ、小倉の地より女性俳句の草分けとして活躍した俳人杉田久女の展覧会を開催します。直筆の書画や原稿、師高演虚子へあてた手紙など、初公開を含む約150点の資料から久女の魅力を紹介します。



杉田久女
俳句をはじめた頃

第3部 輝く作品

無憂華の木蓮はいづこ仏生会

第4部 同人「閑陰」

張りとはす女の意地や藍ゆかた

エピソード 久女伝説

むれ落ちて福貴妃桜向あせす

*イベント

・高橋睦郎さん講演会

・関連講座「俳人・杉田久女を知る」

・久女俳句の足跡をたずねて

・紅葉の美彦山バスハイク

詳しくは文学館HPから展覧会チラシをご覧ください。

詳しくは文学館HPから展覧会チラシをご覧ください。

※観覧料

一般 400円

中学生 200円

小学生 100円

(年間パスポートは適用なし)

※内容

第一部 自己表現の喜びと情懐

第二部 俳句に蘇りて

折して山ほととぎすほしいまゝ



主筆誌「花衣」全5巻

◎資料寄贈者・提供者

受贈雑誌一覧(平成23年9月現在)

寄贈者・提供者

- インクニ編集部 青森近代文学館 赤星千鶴子 阿木津英 麻生壽々代 阿部照子 安岡隆次 石川一歩 市川市文学プラザ 稲光千秋 岩崎要子 烏冬青 江戸東京博物館 遠藤市蔵 大佛次郎記念館 小野浩 岡山市デジタルミュージアム かこしま近代文学館 柏木恵美子 神奈川近代文学館 川原洋子 菊池興安 岸原清行 北九州市立大学 北九州文化連盟 久我秀茂 K&Bパブリッシング K&B 現代美術センターCCA 九州 国立民族学博物館 さいたま文学館 坂井ひろ子 佐藤充 宗香 添田裕吉 鷹取美保子 高山市生涯学習課 大刀洗平和記念館 壺井栄文学館 鶴岡市立藤沢周平記念館 寺井谷子 徳島県立文学書道館 富永佳与子 中川國男 長塚節研究会 中西輝磨 中原中也記念館 中村重義 日本現代詩歌文学館 姫路

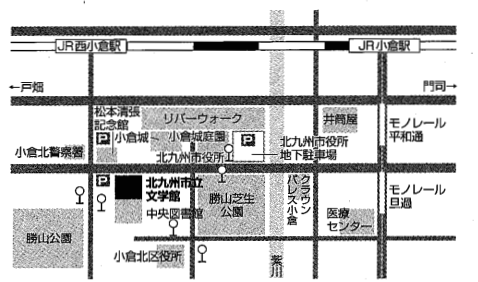
- 文学館 「福井風花随筆文学賞」実行委員事務局 ふくやま文学館 文学表現と思想の会 北海道文学館 前田淑 水川清 三鷹市山本有三記念館 三田美智子 光田まさ子 森鷗外記念会 森田進 柳生じゅん子 安徳由美子 山口公和 山下敏克 山中尚 やまなし文学賞実行委員会 山本ちよ吉田則昭

提供雑誌

- 青嶺 馬酔木 穴生文芸 あまだむ 色鳥 海 沖 海峽派 牙 九州作家 九州文学 九日文 雲 群 炎 月刊俳句界 月刊みんばく 玄海 こだま 沙漠 自鳴鐘 人權の文化 船団 川柳あやめ 川柳くろがね 川柳むらさき たむたむ タルタ 天山牧歌 伝書鳩 天籟通信 葉殻火 虹野 橋 ひろば北九州 べだる 耳空 和布刈通信 奥津野 晶子研究 四人

(五十巻編・敬請賜)

北九州市立文学館と
築城則子さんによる
小倉織が、杉田久女
「花衣」をテーマに
コラボレーション！
オリジナルグッズ
近日販売決定！



- JR小倉駅より徒歩15分
- JR西小倉駅より徒歩10分
- 勝山公園バス停より徒歩1分
- 北九州市役所前バス停より徒歩2分
- 北九州市都市高速大手町ランプより2分
- 駐車場は文学館最寄りの各有料駐車場をご利用下さい

2011年10月1日発行
北九州市立文学館
〒803-0813
北九州市小倉北区城内4-1
TEL 093-571-1505
http://www.kitakyushucity-bungakukan.jp/

■ 開館時間
火～金 9:30～19:00 (入館は18:30まで)
土・日・祝 9:30～18:00 (入館は17:30まで)

■ 休館日
毎週月曜日(月曜日が休日の場合は翌日)
年末年始